

2019年7月7日 日本基督教団 八ヶ岳伝道所 主日礼拝 NO.1075
聖書 コヘレトの言葉 3:11~15/ルカによる福音書 19:9~10
説教 『見いだされて、私は開かれる』

「神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる(コヘレト 3:11a)。「時宜」という訳は古めかしい日本語だが、機が熟しているの謂。旧約聖書ではこんな場合にも使われる。

「わたしはその『季節々々』、～秋の雨と春の雨を降らせる。あなたたちには穀物、新しいぶどう酒、オリーブ油の収穫がある(申命 11:14)。恵みの雨と豊かな収穫を「時宜にかなって」与える神。

「わたしは刈り入れの『とき』に穀物を、取り入れの『とき』に新しい酒を取り戻す(林下 2:11)」。神は「とき」を誤りなく見定め、すべてに対し機が熟した時宜にかなうその「とき」をお与えになる。

八ヶ岳伝道所の歴史は長くないがそれでも四半世紀、機が熟した時に雨が降り、収穫が与えられ、新しい酒が醸された。その経験から「時宜にかなう」神の業に驚き、恐れ、「永遠」の内に招かれていることを予感する(コヘレト 3:11)。

永遠は、延々と長い時間を想像しても掴めない。時宜にかなって働かれる業に打たれるその瞬間、永遠を直感する。「時宜」と「永遠」は神の一つの「時」なのだろう。

「それでもなお、神のなさる業を始めから終わりまで見極めることは許されていない(3:11b)。「永遠を思う心」は与えられるが、見極めるわけではない。

人間の限界は厳然とある。だから無理せず、神からのものではない決まり事に縛られず、普通に喜び楽しみ(3:12)、大いに飲み食いして人生に満足せよ(3:13)と。

自らの現実を明るく肯定し、永遠に不変な神を「恐れ敬うように定められた(3:14)」。

「不変」な方だからといって、人間をちっぽけに軽く見ているわけではない。「すべてを時宜にかなうように造った(3:11)」造り主なのだから。造られた私たちに恵みの雨や収穫を与えようと「時宜にかなう」配慮を下さる、「追いやられたものを、神は尋ね求められる(3:15)」。

喜び楽しんでいる時は見守ってはいても放任、追いやられた時にはあの羊飼いのように(ルカ 15:4)探し出して下さる。

イエスは徴税人ザアカイに関して人々に宣言した。「人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである(19:10)」。「失われたもの」とは、人が神から離れている状態を言う。

ザアカイはなぜ神から離れていたのか。「罪深い(19:7)」穢れた徴税人頭として排斥され、祭司からの清めや祝福も与えられなかった。そのため「神もクソもあるものか」と自棄になり、ローマの権力を笠に着て苛烈な徴税をしていた(19:2,8)。

ザアカイはこのように失われ、追いやられていた。だが、探し出された(19:5)。

ザアカイの救いも時宜にかなっていた。徴税があこぎであるゆえ、信仰は遠慮がちになることは分かる(19:3~4)。

イエスはザアカイを見つけ「今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい(19:5)」と語りかけた。機が熟し「今日(19:5,9)」失われていた彼自身が探し出された。もう自分を開くよりほかない。

ザアカイは愛のまなざしと言葉を受けて改心し、唯一頼みにしていた金から自由になった(19:8)。

「今あることは既にあったこと、これからあることも既にあったこと。追いやられたものを、神は尋ね求められる(コヘレト 3:15)」。

追いやられる(ルカ 19:10)ことは今日あるように明日もある。だが私たちは「その時」に必ず見つけられ、一人ひとりとして深く知られ、愛され、赦され、救われるだろう(19:10)。



《おまけのひとこと》

羊飼いきリストは羊を自由に放っておく 過干渉になりがちなのは羊同士 とはいえキリストは一匹追いやられると血眼になって探す そんな時 99匹 いっそう放っておかれるが自由ではない